

1 研究主題

新たな価値を創出し、生活の中に生かす子ども

ー 子どもの思いや願いの実現をめざし、学び続ける授業 ー

2 はじめに

本年度は、4月に各校の現状や今後の取組について話し合い、昨年度に引き続き上記の研究主題のもと研究を進めていくことにした。1年生部会・2年生部会に分かれて実践報告を行い、対象や事象に対し子どもがどのような思いや願いをもったか、活動からどのような気付きが生まれたか、気付きを高め思いや願いを実現させるための教師の支援はどうだったかを考察した。さらに、今後の授業計画や取組について情報交換を行った。

3 研究の概要

(1) 1年生部会 ～単元「たのしいあきいっぱい」より～

本単元は、秋の自然と関わる活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫して作ったり、身近な自然の様子や四季の変化に気付いたりする学習である。

単元の流れは、次の通りである。

- ①「こうていであきをさがそう」
- ②「こうえんであきをさがそう」
- ③「はっぱやみであそぼう」
- ④「あきのことをつたえよう」
- ⑤「あきのおもちゃをつくろう」
- ⑥「いっしょにあそぼう」

⑤「あきのおもちゃをつくろう」では、はじめに自分が見つけた木の実や落ち葉を使うとどんな遊びができそうか、どんな遊びにしたいかを想像させた。子どもたちは、思いや願いを明確にし、実現に向けて工夫をしながら、こまやけん玉、的当てなどのおもちゃ作りを楽しんだ。

授業では、単元を通してのキーワード『おすすめのあき』を示しながら、活動に取り組ませた。キーワードを示すことによって目標や内容が明確になり、意欲を喚起し続けることができた。『おすすめ』を見付けようとする視点で木の実を観察し



校庭で秋を探す子どもたち



子どもたちが作った秋のおもちゃ

たり、友達と互いの『おすすめ』を聴き合ったりすることで、自分では気付かなかった四季の変化を見いだすなど、友達と関わりながら、気付きの質を高めることができた。

学習環境として、校庭やごく近くの公園で木の実が集められる学校ばかりではなく、身近な自然物の有無や多寡に違いはあるが、各校の実態に即した単元構想のもと学習を進め、子どもたちが身近な自然の様子や変化に気付くことができた。

(2) 2年生部会 ～単元「うごくうごくわたしのおもちゃ」より～

本単元は、身近にある物を使った動くおもちゃを作る活動を通して、よりよく動くように改良したり、もっと楽しくなるように遊び方を工夫したりするなどし、みんなで楽しみながら遊びを創り出す学習である。

単元の流れは、次の通りである。

- ①「つくりたいおもちゃを決めよう」
- ②「うごくおもちゃをつくろう」
- ③「もっとよくうごくおもちゃにしよう」
- ④「あそび方をくふうしよう」

③「もっとよくうごくおもちゃにしよう」の活動では、自分だけのおもちゃを作る中でうまくできないかった困り感を互いに共有させる場を設けた。『おもちゃパワーアップ会議』と銘打ったこの活動で、子どもたちは

知恵を出し合い、それぞれの課題を見いだして自分のおもちゃと向き合い、より



パワーアップしたおもちゃ



おもちゃパワーアップ会議

よく動くおもちゃに改良することができた。困り感を言葉で伝え合うだけでなく、付箋を並べて比較し、ワークシートに記して考えさせることで、困り感を解消し新たな課題を見だし、自分の思いや願いの実現に向かうことができた。

4 成果と課題

1・2年生どちらの部会でも、教師の働きかけとして、キーワードを示すなどの言葉の工夫を行った。気付きにつながる視点や対話的な学習の場を、『おすすめのあき』『おもちゃパワーアップ会議』といった言葉で示すことで、まず子どもたちが対象物に向き合いやすくなる。それだけでなく、活動の目標や内容を明確にしたり、継続して対象物に向き合う意欲を喚起し続けたり、また対話的な学習での拠り所ともなったりする。そのようにして子どもたちの活動を支えながら、自分の思いや願いの実現に向かわせることで、子どもたちの気付きの質も高めることができた。

しかし、子どもの気付きの程度にも、思いや願いの実現への意欲にも個人差がある。対話的な学習の場を効果的に設けながら、子どもたちの気付きの質を高め、思いや願いを実現させるための教師の支援の在り方をさらに追究していきたい。